

科目名	担当教員	授業方法	授業形態	履修者数	履修学年
中国語実習1・2	新沼 雅代先生	実習・実技	遠隔：リアルタイム・オンデマンド併用	40名×4クラス	主に1～2年

【授業内容】

中国語の基礎を身につけることを目的としています。本授業では日本語による詳しい文法解説を受けることができます。語学の学習を通して、中国語圏の文化や社会にも関心を持ってもらいたいです。

【授業の実施方法】

学生の事情に合わせて、①Zoom 使用のリアルタイム、②Zoom 不使用のリアルタイム、③オンデマンドのいずれかの方法で受講できるようにしました。

いずれの受講方法であっても、毎回の授業は構成を 3 パートに分けて準備しました。第 1 パートはパワーポイント資料と講義音声による約 30 分間の解説です。第 2 パートは問題を解いたり課題を作成したりといったさまざまな作業です。作業は音声・筆記・タイピングなどバラエティのあるものにしました（第 1 パートの途中で第 2 パートを組み入れ、合わせて 60 分とする場合もありました）。第 3 パートは Zoom による発音練習、質疑応答、応用会話練習です。諸事情により Zoom に参加しない場合は、代わりに別途用意した中国語学習システムで練習をさせました。この学習システムは発音・発話練習も学習でき、他の学生に気兼ねせず発音練習したいという学生には向いていたようです。学習システムの進捗度は学生ごとに定期的に確認していました。学習システムのゴール（目標レベル）と学期初めに提示し、進捗度に応じて評価しました。その他、毎回の授業で小テストを実施しました。

授業中はいずれのパートにおいても LMS の Q&A やメールで問い合わせや質問を随時受け付けており、それに即時回答を行っていました。学生の状況は LMS のログをみてチェックしていましたが、「裏で監視されている」と学生が感じてしまわないように、私の授業方針や考え方を要所所でクラス全体に伝えました。そのため学生は特に委縮した様子もなくリラックスして取り組んでいたようです。

オンデマンド受講の場合、学生の質問には即時の回答ができませんでしたが 2 日以内には回答をしていました。オンデマンド受講の期限は開講日から 1 週間を期限としました。もともと本授業では LMS のテスト機能を活用して出席 PW を入力させ、そのログの日時を参考にしていました。1 週間後にその授業の出席受付をクローズしました。オンデマンド受講の学生は、1 週間過ぎても授業内容を学修することはできますが、出席 PW は入力できないこととなります。このデータはリアルタイム受講及び期限内にオンデマンド受講した学生との差異化の目安にすることができました。

中間・期末試験については、LMS のテスト機能を活用しました（各カテゴリー（文法、ピン

イン入力、ピンイン選択、フレーズ（中訳入力）、文完成（穴埋め選択）、並べ替え、日本語中訳（簡体字入力）、リスニング）の問題作成）。カンニング対策として、出題数と試験時間を工夫しました。中間・期末試験と毎回の授業の小テストはまったくの別の問題を新たに作成し、オートフィル・オートコンプリートに対応させました。

【授業準備にあたってのポイント・工夫した点】

●授業準備の工夫

コロナ禍にある現在は色々な面で「不安定」なので、本授業はとにかく「安定したもの」、「先の見通しが立つもの」にすることを重視して準備（設計）をしました。具体的には、学期の初めに全16回の授業をLMSで作成して、学期内の全体計画を学生に示しました。回を進めるうちに次回以降の内容に修正や変更が多少必要になるので、第1、2回までの授業は内容を確定しておき、第3回以降は配布資料も含め85%程度の完成度で作っておきました。学生に分かりやすいように、LMSの授業タイトルに「第3回 ○月○日（編集中）」と書いておき、内容を確定したら「（編集中）」の文字を取りました。

各回の授業内容は遅くとも授業前日の夜までには確定しました。授業の進め方に「型」を決めて、学期を通じて変更しませんでした。小さい工夫ではありますが、本授業がルーティン化されることで学生が突然の変更を心配する必要がなくなり、その分自身の生活や他の授業のスケジュールリングがしやすくなると思えました。

●授業内容の工夫

全学的に対面の授業と遠隔の授業が混在するようになれば、移動などの理由からどうしてもその時間に受講できない学生が出るのが予想されました。またコロナ禍のストレスから精神的にリアルタイムで受講できない学生もいるだろうと考えました。ですので私は「遠隔：リアルタイム・オンデマンド併用」での授業を準備しました。工夫した点は、いずれの受講方法でも到達目標レベルを満たす同質の知識が得られ、同質の練習ができるようにしたことです。授業では主にパワーポイントで資料を作成しました。最初に、講義内容のスクリプトを作成しました（授業初めの挨拶やちょっとした雑談も含め、実際の対面授業で話すようなことを全て書きました。イメージとしてはラジオ講座のような感じです）。それを読み上げて録音しました（「講義音声」）。それをパート毎に切り分けて、パワーポイントの該当するスライドにオブジェクトとして貼りました（音声は必要に応じてデコーディングする必要があります）。さらに一続きの講義音声をESVODにも載せました。パワーポイントの（音声）オブジェクトはあるスライドから別のスライドに移ると再生が止まってしまうためです。パワーポイントに挿入したオブジェクト（ワード、エクセル、pdfなど）は時々リンクが切れてしまうときがあるので、パワーポイントに埋めるだけでなく独立した資料としてもLMSに載せておきました。学生が自身のやりやすいやり方で学習できるように、講義音声の聴き方や資料の

入手方法を選べるようにしました。

●中規模クラスにおける「授業の質」の担保

傲慢な考えかもしれませんが、もしも準備した内容をすべて意欲的に取り組んでもらえたならば、今回の遠隔による中国語初級の学修は現行の対面授業以上に効果があると感じました（特に第3パートでZoomを選択した場合）。ですが履修する学生全員にそのように取り組ませるスキルが残念ながら私には無いです。また対面授業の醍醐味である他人との直接的な触れ合いから得られる学修効果というのは低いです。

真面目な内容ばかりだと学生も疲れてしまうので、授業では中国語圏の文化や社会にも関心を持ってもらえるような色々なものを折々に紹介しました。中には面白いと思ってくれた学生もいるでしょうし、関心がない学生もいたと思います。そのような学生には、「クリアすること」に楽しさを見出させ、モチベーションを保つ工夫をしました。具体的には、まず資料を視覚的に分かりやすくし、親しみやすいイラストを載せました。次に授業を3パート構成にしてメリハリをつけました。そしてLMSのテスト機能を活用し「出席PW探し」をルーティンとして組み込みました。最後に中国語学習システムの達成度を学期末までの課題にし、進捗状況に応じて評価しました。

【従来の対面授業との違い～学習効果の観点から】

今回感じたことは、中国語学習においては現行の対面授業よりも思いのほか効果が高いということです。

まず意欲の異なる学生がクラスに混在できることが挙げられます。意欲のある学生は他の学生と足並みを揃える必要がなく自分のペースでどんどん学修を進めることができ、学習意欲を削ぐことはありません。一方、最低限の学修内容を身に付けられれば良いという学生も無理せず自分のペースで進めることができます。

次に「発音練習」です。対面授業よりも学生が思いのほか発音がうまく、特にZoomで応用会話練習を行う学生は自由に発話することがよくできると感じました。通常の対面授業では、クラスで大きな声で発音したり、自由に発話して間違ってしまうことが恥ずかしいようで、結局1年間勉強してもほとんど身に付かない場合が多いのですが、遠隔授業では周りを気にせず発音練習できますし、Zoomでのコミュニケーションは教員に聞きたいことも遠慮せずに聞くことができます。教員や他の参加者との心理的距離も近くなり、発話に臆することが少なかったためだと思います。また中国語学習システムの発音・発話練習は、ある程度大きな声でないとマイクが認識してくれません。本授業では、中国語を音読してword等のディクテーション機能をつかって文字起こし、そのテキストを提出させる課題を出しました。正しく発音できないと正しい中国語（漢字）に変換されませんので、結果的に学生の発音練習の強化になったようです。マイクやディクテーションの精度も多少は影響しますが、一応、私

が音読してみると正しい漢字に書き起こされたので初級の練習には問題はないかと思います。学生へのフィードバックでは、学生の発音と正しい発音を口腔図で示すなどして、間違っただ漢字に書き起こされてしまった客観的な理由を示しました。

次に「正確さ」です。本授業では LMS のテスト機能を多く使いました。テスト機能を使うメリットは正誤を学生に即時にフィードバックできることです。また中国語は漢字を打ち込む際に、中国式の発音ローマ字表記法である「ピンイン」を打ち込むのですが、その漢字の正しい綴りを打たないと表示させたい漢字に変換されません。通常の対面授業では、ピンインのつづりが間違っているにもかかわらず、教員は一人一人の間違いを見つけてあげることが難しいです。学生もピンインに対して曖昧なままでよいと考えてしまいます。ですがテスト機能を使うことで学生は正しいピンインのつづりを身に付けることができます。遠隔授業は PC を使うことで「正確さ」を身に付けるという面で対面授業より効果的です。正しいピンインはその漢字の正しい発音に大きく関係しているため、結果的に発音の正確さ・発音の強化にも通じたと思います。

最後にオンラインの弱い点として「漢字の筆記」を挙げたいと思います。遠隔授業は手書きによる中国語（漢字）を練習する機会がどうしても少なくなります。中国語は今後 PC 入力主流になることは必至ではありますが、手書きで中国語の漢字を書くとその漢字の「構成」を学ぶことができ、正しい中国語の認識力につながります。授業では、中国語の長めの文章を音声で聴き、それを漢字に書き起こして、写メを提出させました。印刷後、間違っただ箇所を手書きで直し、コメントを記入して、スキャンして各自にフィードバックしました。印刷するのではなくペンタブレットを使用すれば、この作業はいくらか楽になるようです。

なお、「Zoom 使用のリアルタイム」を選択した学生は、学修意欲が一番高く、結果的に成績もよくて秀レベルが多かったです。「Zoom 不使用のリアルタイム」を選択した学生の中には「Zoom 使用のリアルタイム」の受講者に劣らない学生もおり、総じて発音もよかったです。成績は優が 5 割、良が 3 割、可が割 2 という感じでした。「オンデマンド」を選択していた学生は、授業を確定すると（授業当日より前でも）すぐに受講してしまう学生と 1 週間後ぎりぎりに行く学生に分かれていました。前者はまじめで課題もきちんと行い優秀でした。一方、後者は可や不可になる場合が多かったです。